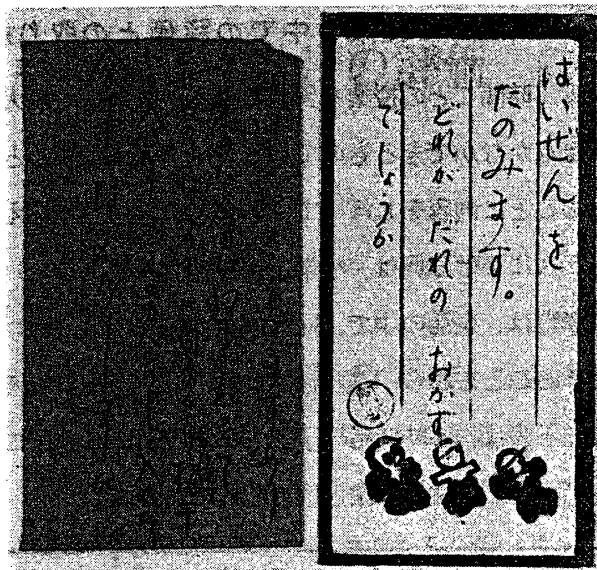
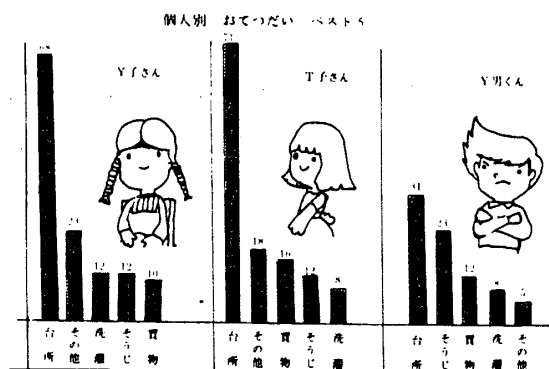


「母の日」を前に、お母さんの仕事を考えることから出発した、お手伝いの定着過程である。

お母さんの仕事の中から、自分たちのできるお手伝いを考えて、「母の日」を中心にした学習を、保護者の協力を得て、お手伝いカードによる家庭学習に発展させた。右の写真は、カードの一枚を紹介したものだが、表にお手伝いの内容、裏にその時の状況を記録してもらって、教室の表にグラフとして掲示していった。その後、学校での学習（例えば、宿泊学習の調理など）が、手伝いという形で家庭の中で取り組まれるようになった。一枚



のお手伝いカードが、子どもたちの家庭生活での定着の状況を示すものではないが、その積み重ねの中で、子どもの態度化の様相を見通すことができるのである。お手伝いカードのような取り組みでは、評価との取り組みがやりっぱなしにならないようにしないと、保護者も教師も大へんな労力をかけて、効果の薄いものになってしまう。5月～7月のまとめの中で、担任として取り組んだ盛山・田口は、「いかに現実度が高くても、学校での取り組みはごっこです」「家庭の一員として役に立ったよろこびを育てられたお母さんの力はすごい」と、学校の立場、保護者の立場を説き、「確かな足跡が残ったはず」と評価している。



お手伝いカードを通した家庭学習への発展は、子どもに対する関心が強く、最初の「させられた手伝い」から、「進んでする手伝い」が多くなってきている。保護者の関心協力はさらに強く、9月～12月のまとめの中で、盛山・田口は、「子どもにやらせて、心苦しい親の気持」が伝わってくるとかいている。

このような家庭学習は、教師と保護者が一人ひとりバラバラでかかわるより、学級の問題、保護者共通の問題として取り上げる方法がある。お手伝いカードによる学習の生活場面への発展は、さらに3学期へと続くことになっている。

4 学期末の評価

1時間の評価、単元を通した評価は、子どもの学習過程での状況把握のための評価であり、同時に、教師が子どものために準備する授業の改善のための評価である。

それに対して、学期末の評価は、子どもの発達の全体像をその段階で的確におさえておくための評価である。従って評価にあたっては、段階別教育内容表の各分野の項目毎に、経験領域の獲得・拡大の状態が、総合的に把握されていなければならない。

表現化に視点をあてる立場では、その事柄が、「できる」「できない」・「知っている」「知らない」が評価の観点ではなく、生活の中で、「定着の方向に向かっている」「定着している」が観点でなくてはならない。

さらに、学期末が総合的評価であるという立場から、「現状の的確な把握」にとどまらず、「次の取り組みの重点は何か」が、おさえられていなければならない。

そのため本校では、現状の的確な把握を資料として保存することと、保護者への通知をかねて、右図のような通知表（総頁数13）を作成し、使用している。

氏名		児童・生徒活動のようす			
学年	学級	1学期	2学期	3学期	
1					総合的
2					総合的
3					総合的
4					総合的
5					総合的
6					総合的
7					総合的
8					総合的
9					総合的
10					総合的
11					総合的
12					総合的
13					総合的
14					総合的
15					総合的
16					総合的
17					総合的
18					総合的
19					総合的
20					総合的
21					総合的
22					総合的
23					総合的
24					総合的
25					総合的
26					総合的
27					総合的
28					総合的
29					総合的
30					総合的
31					総合的
32					総合的
33					総合的
34					総合的
35					総合的
36					総合的
37					総合的
38					総合的
39					総合的
40					総合的
41					総合的
42					総合的
43					総合的
44					総合的
45					総合的
46					総合的
47					総合的
48					総合的
49					総合的
50					総合的
51					総合的
52					総合的
53					総合的
54					総合的
55					総合的
56					総合的
57					総合的
58					総合的
59					総合的
60					総合的
61					総合的
62					総合的
63					総合的
64					総合的
65					総合的
66					総合的
67					総合的
68					総合的
69					総合的
70					総合的
71					総合的
72					総合的
73					総合的
74					総合的
75					総合的
76					総合的
77					総合的
78					総合的
79					総合的
80					総合的
81					総合的
82					総合的
83					総合的
84					総合的
85					総合的
86					総合的
87					総合的
88					総合的
89					総合的
90					総合的
91					総合的
92					総合的
93					総合的
94					総合的
95					総合的
96					総合的
97					総合的
98					総合的
99					総合的
100					総合的

右側は、学習との取り組みを、各具体項目毎に、ねらいとようすにわけて、特に変容のあった実態を中心に記録するものである、左側は、最後のページで、ここでは、学校と家庭が協力して取り組む、次の重点を示すことにしている。これによって、教師と保護者が共通の基盤の上に立って、子どもの将来の社会自立に向って対処できると考えるのである。

以上、本校の取り組む評価について、3つの立場から述べた。ここで強調したいのは、何故評価をするか、ということである。「評価のための評価であってはならない」とよく言われる。特に、評価と取り組んだことの少ない人の意見に多い。しかし、子どもの実態を知るためにも、自分の授業を改善工夫し、学習効果を挙げようとするなら、評価は必要である。ただ、やたらに評価に苦労して、授業も子どもも不在になったのでは困るということである。

言い換えると、評価は子どもの指導のためにあるのであって、目標の消化のためにあるのではないということを忘れてはならないのである。